◎豆腐やまで

須賀川　服部水仙子

何はなくともまあ一杯と、久し振りでの兄様がお歸省に、にこ／＼顔の父が言葉。雪の下圍ひの葱は母様がとつて下さる筈、どれ私は一寸豆腐やまでと、去年の今日の兄様のお土産、今は、燃ゆるやうであつた鼻緒の色も褪せ、漆は剥げて、草履のやうになつた下駄つきかけて外面に出た。松並木を洩れくる月あかり、野も、山も、家も木も、あたり眞つ白の雪あかり、思はずも我身なりを振かへらさせる、榾火に上氣した頰に、束ね髪がハラ／＼、悚然と身に染む風に襟を縮めて、袖かき合して、さて小走りに一丁。八百屋の角を右に曲れば、出合頭の荷馬車一臺、馬子はひたと唄を止めた。見返りもやらず、つと傍すり抜けて五六間、また右に折れての三軒目、とうふ、油揚け、と太い大きな字の障子が半ば開け放してあつて、中からさした燈火が食桶に首つき込んで卯の花の御馳走に餘念ない馬のからだを半面照らして居る。今晩はと躰を現せば、焚火のそばに氷豆腐を編みながら、高聲に馬子と話をして居た姨さんが、揚手拭の顔を此方に向けて嫣然。オヤマアお寒いのによくと例もながらのお愛想も、今日は程よく挨拶して踵をかへした。歸は籠に豆腐が載つて居るので、さすがに驅けもならず、暫くの間に隨分變りましたねぇと先程仰言つた兄様の言葉に、今更ながら邊り見廻してゆく。村全躰舊暦の、今日は六日、家々門々の七五三繩風に揺めいて、嚴めしく門松をかざつたのは村長の家、大きな洋犬が一匹番をして居る。村役場と、派出所と、村で三つの湯屋の瓦斯燈、雪を戴いてショツポリと立つて、今男湯の戸をガラリと勢よくあけて出たのは背の高い職人一人。短い股引から現はれて居る脛のまだ湯氣のたつて居る赤さ。やがて小聲に鼻唄をうたつてゆく。其肩の手拭は家に着くまでに凍るであらう。二つ並んで居る村長の庫の右手の空地は、晝間松井源水の獨樂廻しに人の集ふところ。其また次には、建てかけた間口三間の家が雪の中に白くつつたつて居る。ふと草鞋の音に振かへれば太鼓を抱へた年若な猿曳一人、急ぎ足に早や二三間越え去つた。赤の陣羽織を着た大猿は、頻りに何か喰ひながら意氣揚々と背中に乘つて居る。我家に近い家のない道を、この雪と、この豆腐と、どちらが白いだろう？などゝ考へて、物好にも立ち止まつてくらべて見たが、天の女神が降した白銀の雪にはくらぶべくもない。オヽもう木影に灯影が見える。さぞ母様が待つて居らつしやるだらう、明朝は早く軒の吊し柿を取つて兄様にあげて見やう、都の空にゐますとはいへ、貧書生の身の燒芋に馴れた兄様のお口にはどんなにおいしく召上らるゝやら、さぞまあ召上つて母様を驚せるであらう、などゝ心急げば足も急ぎ、足が急げば凍りたる

道に響く我下駄の冴え、いつしかもう我家の前である。砂壁に高く積んだ薪の上に白い丸いものが一つ、はて何だろう、鳥はもうとつくに小屋に入れた筈と、うかと歩けば足許の馬つなぎ石に躓(つまづ)いて危くも前にのめらうとした。呀(あ)つと思ふ間に、籠の豆腐は一ゆりゆれて角が丸くなつた。其途端、薪の上の白い影は動いて、ニヤーンと優しい玉が一聲。『はゝゝ』折も折、俄におこつた笑ひ聲に思はず顔を赤くして見遣れば、背中の丸い父様が頭を撫でる影と大きな躰をそりかへつて笑ふ兄様の影とが障子にうつつた。

【入力者注】　原文には傍点等がありますが、煩雑を避けるために省略しました。
ルビは入力者の判断で付しました。

底本：「女子文壇」明治四十(1907)年第三巻第四號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年三月十一日

リンク：水野仙子ホームページ